

ライフストーリーから見る留学生の留学実態

— アジア出身の女子留学生のライフストーリーを例に —

A study on living of international students in Japan through life-story interview and questionnaire : Life-stories of female students from Asian countries as example

苗 茨^{*}

Miao Qian^{*}

Abstraction : An interview about life-story was taken to find the actual situation of female students from Asian countries. The result shows that there are several varieties on the reasons of the decision to study abroad and the reasons will affect the evaluation of their study abroad, the forming of their identity and their life planning later. This research is hoped to contribute to the development of international students accepting system in Japan.

Key word : LIFE-STORY, REASON, IDENTITY, LIFE-PLANNING,
ACCEPTING OF INTERNATIONAL STUDENT

はじめに

近年、日本の大学等で留学している留学生の数が年々増えている。独立行政法人日本学生支援機構が発表したデータによると、2015年5月では、外国人留学生総数は208,379人で、前年度5月と比較すると24,224人（13.2%）増加したと分かった。そのうち、大学に在籍する外国人留学生数は152,062人で、前年比12,877人（9.3%）増加したという。出身地域別では、アジア地域92.7%で圧倒的多数を占めていることが分かった。

また、法務省は2015年10月に在留外国人数を公表した。その数字によると、2015年6月時点、在留外国人総数は2,172,892人で、2014年末に比べ、86,289人（2.4%）増加したという。国籍、地域別では、中国が全体の30.2%を占め、韓国・朝鮮（22.9%）、フィリピン（10.3%）、ブラジル（8.0%）、ベトナム（5.7%）と続く。

在留外国人数の増加率（2.4%）と留学生増加率（13.2%）を比べてみると、2015年において、留学生がほかの資格で在留する外国人より、その数が著しく増えていることが明らかである。そのうち、アジア出身の留学生が多くの数を占めていることも分かった。

そこで、より多くの外国人留学生を受け入れるのに、どんな環境づくりをしていけばいいか、どのように教育体制を整えていかなければならないのか、今の日本の大学教育が直面する重大な課題になる。本論文はその手掛かりの一つとして、留学生のライフストーリーの把握によって、個々の私的歴

^{*}日本経済大学経済学部商学科

史の中で、留学生の日本留学の動機、そして来日後の生活環境、勉学環境に対する満足度、さらに、留学生のアイデンティティの確立、人生形成、将来の人生設計にどんな影響を及ぼしているか、そのうえ、留学の動機と満足度とのかかわりを考察し、留学生が日本留学に対する期待の本質を見出し、大学の留学生受け入れ態勢や国際化の方向性を展望するものである。

1 先行研究

ガーゲン（2004）では、「ライフストーリー」について、次のように述べている。「ライフストーリーとは、その人の過去にあった出来事をつなげてできる『自己についての語り』であり、自己についての多くの物語を集大成した一つの物語である」（P247）。

それに、「アイデンティティ」について、「ある人に本質として与えられた、不変的なものではなく、状況によって常に移り変わるものである」と定義している。

本論文では、留学生に対して、聞き取りとアンケート調査を行う際、ガーゲンの提唱する「ライフストーリー」を作成し、さらに、留学生の「アイデンティティ」について考える場合、ガーゲンの定義にしたがうことにする。

中山（2010）では、「第二言語使用者の『自己感』という比較的新しいテーマを取り上げ、ライフストーリーが、第二言語使用体験を明らかにする一つの手法であることを示した」（P101）。中山は「アイデンティティが状況によって移り変わる中でも、人は、『私』という統一感を保っている複雑な存在だ。その統一感の源泉の一つと考えられているのが、ライフストーリーだ」と述べ、ライフストーリーがアイデンティティの統一感の原点と見ているので、韓国人留学生フン君のライフストーリーの記述を通じて、日本語学習におけるそのライフストーリーの影響を分析したが、「ライフストーリーという手法は、アイデンティティは日常的なアイデンティティワークを通じて（再）構築されるという前提に立ってはいるが、個々の場で（再）構築されるアイデンティティの個人史的な意味を考えられる」、「アイデンティティが構築される場と非常に密接な関係を持っている。場が変われば、アイデンティティも変わる。そう考えると、ある人のアイデンティティは、その人が参加した場の数だけ（再）構築されることになる。話す言語が変わると『自己感』が変わることは、ある場に固有に（再）構築されるアイデンティティ（たち）の違いによると考えられる」という観点から、アイデンティティの構築へは、話す言語を含む「場」の関与が大きく、「場」の違いによって違うアイデンティティが構築されると論じ、さらに「そこで語られた過去の言語実践に接近するすべを持たないがゆえに、そこで行われている日常的言語実践をブランクに入れ、結果として出来上がったストーリーをモデルとしてしまう危険性があった」と指摘する。

本論文では、中山の論じる「ライフストーリー」による留学生の「アイデンティティ構築」への考察という手法が効果的だと考える。しかし、中山の論述は第二言語学習という視点から留学生のアイデンティティ構築を考察するもので、本論文ではさらに留学生の留学生活におけるあらゆる面でのアイデンティティ構築を考察していくものにする。

竹内（2010）は、「留学生リクルート支援活動をより効果的に行うために必要な知見を得るため、

留学生アンケートを実施し、徳島大学に在籍する外国人留学生の徳島大学留学に至る経緯や留学経験の感想について調査し、その結果をもとに、留学生が徳島大学に何を期待し、どのように評価しているかを明らかにし、どのような情報を発信が効果的であるかを考察したものである。アンケート調査の項目は以下のようなものが含まれている。

「学生自身属性」に関しては、日本滞在期間、在学期間、学費出資者及び奨学金の受給、「日本留学」に関しては、第一希望の留学先、日本留学の目的・理由（学位取得のため、奨学金獲得のため、日本留学の奨学金を得たため、高度な科学・技術を学ぶため、日本の経済と技術の発展、日本文化への興味、日本企業への就職、母国以外の国での就職、家族・先生・知人の薦め・異国や異文化での生活経験）、来日前の日本語学習、「徳島大学留学」に関しては、第一志望の大学、徳島大学留学の目的・理由、徳島大学留学に関する情報源、徳島大学に関する評価と満足度、徳島大学終了後の予定と希望等である。

簡潔明瞭で、特定の大学を在籍する留学生の留学状況を分かりやすくまとめているものであり、本論文の調査へもヒントを多く与えてくれた。ここで、注目したいのは「日本留学の目的・理由」という項目である。竹内の分析によれば、「高度な科学・技術を学ぶため」、「学位取得のため」、「日本の経済と技術の発展」、「日本文化への興味」は留学先を日本に選ぶことを強く推しているということが明らかになったといった要素が日本留学の最も重要な理由になっている。

ここで、「日本留学の目的・理由」として設けられている選択肢を見てみると、まず、留学することが前提として、そこで留学先をどこにするかという決断をする際に、「日本」という国にしたのはなぜかを問いかける設問である。どちらかと言えば、「日本」が留学先としての優位性を重んじる設問と言える。本論文においても、「日本留学の動機」といって、留学生の日本留学の目的と理由について調査をするが、その趣旨の設定は竹内と異なるものである。後述にあるように、本研究の調査は、留学生への聞き取りの中から、日本留学までの生活の流れ、出来事（すなわち、ライフストーリー）を踏まえて、「なぜ留学する、そしてなぜ日本」といった決断をするに際しての留学生の内面的心理を捉えようとしたものである。

譚・渡邊・今野（2010）は本研究の目的は、在日中国人留学生の異文化適応（主観的幸福観、学習・生活への適応）に対する動機づけの影響について、自己決定理論にもとづいて検討すること」を目的とし、日本の大学に在籍する中国人留学生307名に実施したものである。「その結果、中国人留学生において、自己決定性の高い動機付けは主観的幸福観および学習・生活への適応状態と正の関連」であることが分かり、「他方、自己決定性の低い動機付けは主観的幸福観及び学習・生活への適応と負の関連を示し、このような自己決定性の低い動機付けを持つ留学生に対してどのような援助が必要になるのか」という今後の課題を示したものである。

さらに、「留学生の適応に影響する要因として、これまでに指摘されてきたものには、学習環境、生活環境などのデモグラフィック要因や環境条件など個人属性のほかに、日本語能力、日本社会特有の対人的スキルの獲得度、対人関係の広がりやソーシャル・サポートの量などがある。さらに、対人コミュニケーション行動、日本人との交流、ホスト国の言語能力の欠如やホスト国に関する社会知識不足などが対人関係の形成困難の原因となり、留学生の適応を阻害する要因となることが示唆されて

いる」など、「留学生の言語面、行動面の問題に焦点を当てた研究」が多くあるが、「留学生の心理的側面について、適応との関連を検討した研究は少ない」と指摘し、「心理的側面として留学動機づけと学習動機づけを取り上げ、自己決定理論にもとづいて、留学生の動機づけと適応の関連を検討」をした。

ここで「心理的側面としての留学動機づけ、学習動機づけ」についての質問項目は1. 同一化的動機づけ、2. 取り入れの動機づけ、3. 内発的動機づけ、4. 外的動機づけ、5. 剰余項目と大きく五つのカテゴリーにまとめ、さらに28の細かい項目に分けて、「自律的留学動機づけ」を中心に調査を行った。ここでいう「心理的側面」への力の置き方は、本論文の調査における視点の角度と重なる部分が多くあり、参考する価値も大きかった。ただし、本論文では、多数の留学生対象に実施するものではなく、個別の留学生に対して聞き取りやアンケートをするような形をとっているため、各カテゴリーを占めるパーセンテージでの分析ではなく、個々の留学生の具体的な状況を基づいて、その留学動機づけという「心理的側面」を分析し、より深層的な「心理」を引き出すことによって、新たに留学動機をカテゴリー化をしようとする。

源島（2014）は「日本の大学のグローバル化に向けた改革推進のための参考資料」を得ようとして、留学生の「日本を留学先に選んだ目的や理由、その中でも長崎大学に何を求め、何を期待し、何を評価して留学先として選択したのか、それがキャリア観や将来の就職とどう関連しているのかを調査した」もので、さらに、「外国人学生の留学観」と就職希望の関連性を分析し、「日本の大学における留学生受け入れ増加への提言」をした。

源島はこの調査結果を「将来の就職についての」希望と合わせて分析し、その関連性を見出し、さらに、大学の留学生受け入れへ提言している。ただし、一つ指摘したいのは、これらの選択肢は多選できるように設定されているので、調査対象の留学生は選択をした項目について、必ずしも「これ」といった目的として認識しているのではなく、些か漠然とした感覚しか持っていないかもしれない。すなわち、日本留学は個々の留学生の人生設計において、どんなものなのか、その決断の決定的な根拠としては、動機づけの強さが足りない部分があると言えよう。

茂住（2013）は「私費留学生にとっての『日本留学』の意味を検討するため、彼らの時間的展望を明らかに」しようとしたものである。「『時間的展望』とは、『過去、現在、未来を生きる個人の生きる意味を理解することを目指す研究であり、この人間個人の人生観や価値観には過去についての評価、現状についての認識、未来についての決断などが含まれているという考え方に基づくアプローチである」と述べている。その調査結果から、「留学生はポジティブな現在指向性を持ち、過去に対する『後悔・無関心』、未来に対する『希望・目標の実現』という時間的態度」に新たな傾向が見られ、さらに、「日本留学はネガティブな過去をリセットし、日本生活において自分を試し他者から承認されるという、社会との相互作用によって自己効力感が高まり、自己形成が進んでいくプロセス」として捉えられると主張した。

特に、留学生の自己形成のプロセスにおいて、日本留学はどんな役割を果たしたかについて、「彼らにとっての日本留学はネガティブな過去をリセットするための移動であると同時に、青年期の課題である、自己形成プロセスとしての国際移動であったということが出来る。日本留学に係るプロセス

には『他者からの承認』がなければ乗り越えられない課題がいくつもあり、それをクリアしてきたことが彼ら自身の充実感や自己効力感を高めてきた…この経験が彼らの『留学』という生活空間、『留学』というプロセスにおける他者からの承認を認識する機会であり、その度ごとに留学生は『これでいいんだ』『これでいける』という自己効力感を育み、それが彼らの自己形成を進めてきたのだと言える」と日本留学を留学生の「自己形成」のプロセスにおける重要な役割であると位置づけをした(P12)。

茂住の以上の論述は本論文における留学生の「留学の満足度」、「アイデンティティの形成」、「将来の人生設計」についての調査に際して、たいへん参考になっている。いっぽう、本論文の調査結果からは、その論述を裏付けることのできるものも抽出ことができた。これについて、後述する。

牧野ら(2012)の特別課題研究は「東アジアの教育—その歴史と現在—」をテーマに、複数の学会発表、研究会発表などの報告書がある。

牧野ら(2012)では、「越境する留学生—文化的融合と寛容にともづく受容のために—」を基本的テーマとして、とくに急増する東アジアからの留学生を主な対象として、その文化的越境と融合、そして新たなアクターとしての自己形成の姿を追いつつ、留学生教育をどのように考えるべきなのか、また彼らの日本の教育学研究に対する貢献とはどのようなことなのかなどを検討し、特に留学生ライフストーリーと自己変容を研究の軸として置きつつ、彼らが異文化との交流の中でいかにして新たなアクターとして自己を立ち上げているのかを考察すること、その上で、彼らのもたらす日本の教育や地域社会へのインパクトと受け入れ側の変容・組み換えを考察し、留学生受入の教育的な意味を検討することを基本的な課題として、研究を進めた。

そして、「そのための基礎資料として、日本への留学生・留学経験者のライフストーリーの聞き取り調査を進め、資料集としてまとめ」た。その「聞き取りでは、留学背・留学経験者各自の日本との出会い、留学の動機・きっかけ、留学生活、日本観の変容、母国への意識の変化、自分を問い返す新たな視点の獲得、そして、留学後の人生設計などさまざまな内容が語られており、それぞれ異なるものでありながら、社会情勢や日本と母国との関係に規定された選択であり、しかも各自の自覚的な選択の結果でもある。その上、それは、いま過去を語ることで、それを生きようとする彼ら自身の現在でもあるという構成を取っている』と述べ、その中からさらに「日本における留学生教育の課題」と見出そうとした。

恒吉・川歌(2012)の報告書では、聞き取りは「個々の留学生の状況や意識を反映しながらも、その時々々の社会情勢や日本社会と留学生の出身国・地域との関係に規定されながら、同時に各自の自覚的な選択の結果でもあるという性格を持っている。留学生・元留学生の当事者としての視点から見た日本の留学経験とは何なのか。留学生の語りの中に見えてくる日本の教育課題とは何なのか。それを検討することによって、日本の大学のあり方(国際化等)や留学生支援の方向性についても、問題提起ができよう」とした。

2 留学生のライフストーリー

筆者は2016年9月と2017年2月に、2回に分けて日本経済大学経済学部の留学生4名にインタビューし、アンケートを実施した。調査実施の目的は留学生個々のライフストーリーを把握し、留学までの経歴と留生活実態を鑑み、留学動機と留学に対する満足度、将来の人生設計の関連性を明らかにし、今後の留学生の受け入れ態勢を整えるうえで、資料として提供することにある。調査対象4名はアジア出身の女子留学生に絞っているが、これはアジア出身の留学生の増加と女子留学生についての実態調査がまだ少ないという背景があるからである。この4名の女子留学生の年齢は平均30.5歳、来日年数は4年～8年である。ここで、彼女たちのことをそれぞれAさん、Bさん、Cさん、Dさんと呼ぶことにする。詳しい情報は下記の通りである。

表1

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
出身国	中国	韓国	ベトナム	モンゴル
年齢	32	31	28	31
来日年数	8年	4年	5年	4年
学年	4	3	3	2

2.1 1回目の調査（インタビュー）

1回目の調査は2016年9月に実施したインタビュー調査である。4名の留学生にライフストーリーについて聞き取りをし、本人の了承を得て録音データをとった。形式は学生に質問をして、答えてもらうという式で、学生の答えに応じて、気になる事柄についてさらに入り込んだ質問をしていく。質問項目は以下のとおりである。

- ① 出身地はどこですか。どんなところですか。
- ② 親はどんな人ですか。
- ③ 少年時代のあなたはどんな子ですか。
- ④ 高校まで何か特に印象に残ったことがありますか。
- ⑤ 高校を出てからの経歴について聞かせてください。
- ⑥ 日本留学に至る経緯を教えてください。
- ⑦ 来日してからの経歴について聞かせてください。
- ⑧ 今の時間分配はだいたいどうなっていますか。
- ⑨ 日本社会にどれぐらい溶け込んでいますか。
- ⑩ 今、一番困っていること、解決したいことは何ですか。
- ⑪ 将来の計画はありますか。

2.1.1 Aさんの場合

出身は中国南部、親はしいたけ作りの農家で、親戚が営む採石場の手伝いもしている。両親はAさんにとにかく優しく、同じ世代の女の子は中学までいったら働き始めたのに、Aさんを大学まで行かせてくれた。彼女は高校まで、おとなしい学生だったが、成績は中ぐらいだった。社会活動にもあまり参加したことはなかった。(大学2年から自主的に参加) 親から成績についてのプレッシャーもなく、健康体でいれば満足してくれていた。高校から寮生活を送っており、反抗期もなく言われたとおりのことをしていた。大学時代にゲームにはまり、友だちと耳に穴を三つ開けたのは唯一の反抗的なことで、印象強かったという。

大学は国際貿易関係の短大で、そこで貿易日本語専攻で3年間日本語を勉強した。卒業してから、いとこの会社で仕事を始めた。主にスイスのバイヤーと中国の工場との間のビジネスのやり取りをした。英語が良くないので、苦闘した。一年余り働いて、やっぱり日本語になじみがあって、日本留学をしようと思い、あっせん会社を通じて、来日した。

日本では、日本語学校2年間、専門学校2年間の勉強を経て、日本経済本大学に入学した。この大学に入ってから、人生が変わったような気がする。2年生のときに大学のユネスコクラブに参加し、副代表を務めることに。これをきっかけに、性格が少し社交的になり、自分に自信を持つようになった。

今の時間分配は勉強50%、アルバイト20%、レジャー・社交30%程度になっている。

日本では交流のあるのはアルバイト仲間かユネスコのメンバーで、暮らしの範囲が狭いので、年齢の合う人になかなか巡り合えない。

悩みは日本語が上達しないこと。自分は文法をしっかり勉強していないため、文章を書くときめちゃくちゃになる。

旅行したい。解放されたい。親孝行できてなくて、申し訳ない。

将来は大学院に行くか就職するか迷っている。日本文化専攻の大学院に行きたいが、その後の就職も不安だ。周りから就職するように言われている。長く日本に暮らしたいが、上手くいくかどうか心配だ。自由に行き来できることが望ましい。親の世話もしたい。

2.1.2 Bさんの場合

韓国ソウル出身。ひとり娘だが、父親が地方で仕事していて、いつも家族と離れていた。小さい時から自立心が強く、親を頼りにしないタイプだ。中学までは不良仲間とよく遊んだ。高校から真面目に勉強し始めて、パソコンの資格を取った。その後、短大で観光を専攻し、2年間日本語を勉強した。その後、保険会社の電話対応の仕事に就いた。

プライベートの出来事でとてもショックを受けて、それをきっかけに、**WORKING HOLIDAY** で日本に半年間滞在することにした。その後、留学ビザで再度来日、2年間日本語学校で勉強したあと、大学へ進学した。

日本の生活にはもう慣れている。同じ日本語学校の韓国人友だちがいて、大学では台湾出身の男友達がいるが、そのほか親しい人がいない。毎日、学校と家の往復コースで、ほかに行くところもなく、

遊びもあまりしていない。

最近是不眠症で悩んでいるという。

将来はできれば日本で就職して、日本で生活したい。でも、特にこだわらない。

2.1.3 Cさんの場合

出身はベトナム南部。お米や果物の産地で、メコン川が流れている。観光客が果物狩りによく来る。父親は時計、ミシンの店を営んでいて、裕福な家庭だったが、十年前両親が離婚、三兄弟（弟、妹）を引き受けた母親と暮らし始めて、貧乏な暮らしを送った。母は服を作って売っている。Cさんは小さい時から真面目な学生で、英語が好きだった。クラスで班長をしていた。印象に残っていることは、小学生の時、自分でお菓子を仕入れて、町で売ったこと。住んでいる町は商業がさかんなところで、自然に商売をやりたいと思った。中学校の時、お父さんのお店で手伝うこともあった。

高校を卒業してから、働き始めた。兄弟の教育費や、親を楽にしたいという思いで、出稼ぎすることにした。それで、研修生として日本に来て、3年間岡山にある工場で働いた。帰国後、留学ビザで再来日をした。

日本で日本語学校を経て、大学に進学した。いまは大学での勉強もしっかりしているし、妹を母国から呼んできて、こちらで勉強させている。旦那さん、妹と三人でご飯を食べるときはいちばん幸せを感じる。

時間分配は勉強30%、アルバイト50%、その他20%になっている。

日本人の考え方に理解できるようになった。人のプライベートを関与しない主義の日本人に対して、ベトナムでは人からいろいろ言われるから、こちらのほうが暮らしやすいと思っている。

将来について、日本で就職したいが、ベトナムではお弁当配達はあまりないので、お店を作りたい。それまで資金をためる。将来的には起業して、ベトナムの就職の機会を増やしたい。

2.1.4 Dさんの場合

モンゴルのウランバートル出身で、祖父はモンゴル相撲さんの写真を撮る写真家、国費留学生でドイツ留学していた。父親はジュエリーを作るアクセサリ職人で、ロシア留学歴を持っている。母親は父が留学先で知り合ったロシア人、シベリア地方の出身。家庭環境は国際的で、自然にグローバルな考え方が身に付いたという。

父親はDさんの教育に厳しく、週一回学校に行って先生と話をするぐらいだ。小中学校時代、友だちがあまり作れなくて、さびしかった。勉強が好きではないが、学業は優秀で、理科の大会に出場するほど得意だった。

モンゴルの大学に入学したが、退学してドイツ留学へ。当時、モンゴルから逃げ出したい気持ちだった。ドイツ語学校を経て、大学工学部に入学して、4年半在籍した。ドイツでの生活で、内向的な性格Dさんは明るく、社交的に変わった。本当の自分が引き出されたという。しかしながら、成績不振で、あえなく退学することになった。

これからどうしようと考えているところ、日本在住の叔母さんの誘いで、日本留学を決めた。まず、

帰国して1年ぐらい資金を稼いで来日した。日本語学校の2年間、出席が良く、成績より、たくさんの友達を作って楽しかった。今の夫にもめぐり合い、結婚できた。日本経済大学に入って、特に神戸ユネスコの会員になって、活動していくうちに、勉強にも社会活動にも積極的になってきた。いま社会問題について研究しようと考えている。

時間分配は勉強30%、アルバイト15%、社会活動・友だち付き合い35%、家族20%という具合だ。

日本人との付き合いはママ友との付き合いから本格的に始まったという。最初は複雑な関係にとまどい、仲間外れになっていた時期もあったが、日本人の考え方がだんだん分かってきて、自分の性格も理解してもらえたので、今は良好な関係を保っている。そのおかげで、日本人の国民性について理解が深まり、いまはアルバイト先などでもスムーズな人間関係ができていく。今の一番の悩みは結婚相手がいまだに父親に認められず、いつ解決できるか不安だという。卒業後は日本か中国で生活する予定だそうで、どうやらモンゴルに戻る気はないようだ。

2.2 ライフストーリーから見る留学動機

ここで、この4名の留学生のライフストーリーを通して、日本へ留学する動機について共通した特徴はあるか、また相違している点はどこにあるか分析していきたい。

まず、共通した特徴について見てみる。4名はどちらも日本留学する前から、日本とは何からの繋がりを持っていることが分かった。そのうち、Aさん、Bさんは在学した大学で日本語の受講歴がある。Cさんは日本で働いていた。Dさんは日本在住の親戚がいる。しかしながら、これらの繋がりはいずれもその学生のライフストーリーの中の背景として存在し、日本留学への決断の直接な原因ではないと言える。そのかわり、彼女たちは日本留学するまでは、就職をしてしばらく仕事をしていたり、ほかの海外へ留学にいたりして、ある程度日本とかけ離れたことに取り組んでいた。ここで、なぜある時点で日本へ留学するという決断をしたか、という留学の直接な原因となる出来事は何なのか、さらに、その中から、彼女たちの個々の留学動機や日本留学にどんなことを期待していたかといった心理的な動機づけを探ってみよう。

2.2.1 Aさんの場合

Aさんのライフストーリーにあったように、彼女は留学まで母国で仕事をしており、特別に大きな挫折もないが、馴染みのない英語を使うのがストレスに感じ、仕事から達成感が得られていない。言葉や文化など馴染みのある日本にかかわる仕事がしたいということで、日本留学を決めた。このようなきっかけで留学を決めた学生は、それまで順調に成長していたが、さらに達成感と自己肯定を求めようとして、日本留学をすることにしたわけである。したがって、彼女の日本留学に自己肯定の実現、さらなる自己成長という期待を寄せられていると考えられる。

茂住（2013）では、「日本留学に係るプロセスには『他者からの承認』がなければ乗り越えられない課題がいくつもあり、それをクリアしてきたことが彼ら自身の充実感や自己効力感を高めてきた」と述べている。Aさんの日本留学には、いわゆる「自己形成」、「他者からの承認」といった自己成長への期待が託されていると考えられる。ここで、Aさんの日本留学の動機を「自己成長型」と名付けることにする。

2.2.2 Bさんの場合

Bさんのライフストーリーにあったように、Bさんにはプライベート的に辛い出来事があって、その苦しい思いから脱出しようと、仕事をやめて、Working Holiday ビザで日本へきた。その後、留学のため再度渡日。留学先を日本にしたのは、短大で日本語の勉強歴があって、Working Holiday に滞在した日本での経験が良かったからだと考えられる。このようなきっかけで留学を決めた学生は、それまでの生活状況について、不快感や辛い思いを持っており、その生活の場から新しい環境に移行しようとする。その移行により、不快感や辛い思いを最大限払拭し、心理的にリフレッシュし、人生のリセットということが目的となっている。したがって、留学への期待は、自己成長という前向きなものより、それまでの古い自己との決裂にあると思われる。

茂住（2013）は「留学生の自己形成のプロセスにおいて、日本留学はどんな役割を果たしたかについて、彼らにとっての日本留学はネガティブな過去をリセットするための移動であると同時に、青年期の課題である、自己形成プロセスとしての国際移動であったということが出来る」と論述している。Bさんの場合は、留学の動機は正に上述の「ネガティブな過去をリセットする」ことにあり、ここで、「逃避行型」を呼ぶことにする。

2.2.3 Cさんの場合

Cさんのライフストーリーにあったように、彼女は留学までの経緯をたどってみると、研修生として日本で3年間働いたことは大きなきっかけであると考えられるが、研修期間満了後の進路を決める際、働き手としてではなく、留学生として日本で勉強したいという発想の大きな要因は、留学によって、よりハイレベルの人生を送りたいという本人の強い意志にあるのではないかと考えられる。具体的にいうと、自分の兄弟をもっとよい教育を受けさせたい、親を苦勞なく生活してもらいたい等であるが、このようなきっかけで留学を決めた学生は、それまでの生活状況に満足できなく、より豊かな暮らしを送り、成功した人生を成し遂げようとするタイプである。

譚・渡邊・今野（2010）において、「自律的留学動機づけ尺度」について調査したところ、「同一化的動機づけ」の一種で、「自分の将来の成功と結び付く」という項目があるが、Cさんの場合は、このような日本留学に人生の成功を託したケースであり、ここで「成功追求型」と呼ぶことにする。

2.2.4 Dさんの場合

Dさんのライフストーリーにあったように、彼女は成績不振の関係で、ドイツの大学から退学を余儀なくさせられた。ピンチに陥ったDさんはどのようにこの局面を打開したらいいかと悩んでいたとき、日本在住の叔母さんに勧められ、日本留学の意を固めたという。ピンチに直面した際、そのピンチを乗り越える方法として、日本留学に決定したわけである。なので、Bさんの「逃避行型」同様、日本留学に新天地を求めるという意味づけが伺えるが、「逃避行型」は脱出目的重視というところを見ると、比較的マイナス思考の動機付けと言えるが、Dさんの場合は「問題解決」を重んじる傾向にあるので、比較的プラス志向の動機だと言えよう。ここで、Dさんの日本留学動機を「問題解決型」と呼ぶことにする。

以上、4名の女性留学生の日本留学動機について分析し、4つのカテゴリーにまとめてみた。以下表2の通りである。

表2

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
日本留学動機のカテゴリー	自己成長型	逃避行型	成功追求型	問題解決型

2.3 2回目の調査（アンケート）

1回目のインタビュー調査に引き続き、およそ半年後の2017年2月に、2回目の調査を行った。方法はアンケート問題を渡して、回答してもらうという形である。調査の目的は、日本での留學生活に関するもの、主に留學生活の満足度、自己成長認識度、アイデンティティの形成、日本観の変容、将来の人生設計について解明しようとするものである。

アンケート用紙に設けた質問は以下のとおりである。

表3 アンケートの質問事項

1 全体として、日本での留學生活に期待したものはどれくらい満足できていますか。	
① 期待以上	
② 期待通り	
③ やや期待はずれ	
④ まったく期待はずれ	
2 満足できたことを下記から選んで、()の中に具体的例として挙げてください。(一つ以上も可)	
① 日本語の上達 ()	
② 日本人との交流 ()	
③ 学校の授業や勉強 ()	
④ 住居・生活環境 ()	
⑤ アルバイト ()	
⑥ 日本の習慣や考え方 ()	
⑦ 自分の健康状態 ()	
⑧ 生活費 ()	
⑨ 留学生の支援 ()	
⑩ その他 ()	
3 満足できなかったことを下記から選んで、()の中に具体的例として挙げてください。(一つ以上も可)	
① 日本語の上達 ()	
② 日本人との交流 ()	
③ 学校の授業や勉強 ()	
④ 住居・生活環境 ()	
⑤ アルバイト ()	
⑥ 日本の習慣や考え方 ()	
⑦ 自分の健康状態 ()	
⑧ 生活費 ()	
⑨ 留学生の支援 ()	
⑩ その他 ()	

4 日本留学の中で、自分が以前より、どの面で成長できたと思いますか。(一つ以上も可)

① 自立力 ()

② 人間関係の構築力 ()

③ 異文化への適応能力 ()

④ 視野や考え方の多様化 ()

⑤ 健康管理 ()

⑥ 自己設計能力 ()

⑦ 実行力 ()

⑧ リーダーシップ能力 ()

⑨ チームワーク ()

⑩ その他 ()

5 日本留学の中で、自分の個性について、以前よりはっきりした考えができたのは、どれですか。(一つ以上も可)

① 自分の国の人間としての意識が強くなった

② 母国と日本の文化の違いに気付いた

③ 自分の世代の特徴について意識し始めた

④ 自分の女性としての個性を認識している

⑤ 自分がほかの人と違うところを意識し、それを活かすようにしている

⑥ その他 ()

6 以前の日本、日本人に対するイメージと今のイメージはどう変わりましたか。

以前 ()

現在 ()

7 将来の計画についてお答えください。

① 将来の仕事 ()

② 将来の定住国 ()

③ 将来の家庭図 ()

④ 自分の子どもの将来 ()

⑤ 今一番の夢は ()

2.3.1 日本留学の満足度について（設問1～4）

次に4名の回答をそれぞれ紹介していく。まず、設問1～4では、日本での留学生活について、期待していたことがどんな具合で満足できているか、或いは満足できなかったかについて聞いた。以下、各留学生の回答を図表で示したい。

表4 Aさんの日本留学満足度について

満足度	やや期待外れ
満足できたこと	1 学校の授業や勉強（学校でクラスメートと先生たちと仲良くなった） 2 住居・生活環境（日本の生活環境がきれいで、安心・安全だ）
満足できなかったこと	1 日本語の上達（予想したほどうまくなれなかった） 2 日本人との交流（もっと広い範囲で日本人と交流したかった）
成長できたこと	1 自立力（知らない町にも一人でいけるようになった） 2 異文化への適応能力（和食にある刺身や納豆が食べられるようになった） 3 視野や考え方の多様化（異国人の立場に立ってものを考えることができるようになった）

表5 Bさんの日本留学満足度について

満足度	期待通り
満足できたこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 学校の授業や勉強（留学生として学校での授業や勉強はがんばったと思う） 2 日本の習慣や考え方（日本人の考え方や文化習慣に理解できるようになった）
満足できなかったこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 日本語の上達（学んだ日本語をあまり使えなかったので、実力が伸びなかった） 2 日本人との交流（学校に日本人がいないため交流ができなかった） 3 自分の健康状態（運動不足で体が良くなく、病がちです）
成長できたこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 自立力（もともと自立力強かったが、日本に来てもっと強くなった） 2 その他（お金をためることができる、贅沢しないように自制力がつよくなった）

表6 Cさんの日本留学満足度について

満足度	期待通り
満足できたこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 日本人との交流（学校やアルバイトで日本人との会話のチャンスがあって、日本語を勉強できた一方、日本人の習慣や考え方が少しずつ理解できるようになった）
満足できなかったこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 日本語の上達（自分が勉強することと試験のずれがあったようで、まだN1合格できていない）
成長できたこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 人間関係の構築力（誤解があり得ると気付き、今はできるだけ相手の気持ちを配慮して話をするようにしている） 2 視野や考え方の多様化（以前はお金だけを重視していたが、今は努力して何かが達成できたときに味わえる幸せが大事だと考えている）

表7 Dさんの日本留学満足度について

満足度	期待した以上
満足できたこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 日本語の上達（おしゃべりが好きなので、会話力が上達したように思う） 2 住居・生活環境（安全で便利。何より自由に暮らせること） 3 アルバイト（仕事の大変さを感じることができ、両親の大切さに気付かせてくれる）
満足できなかったこと	日本人との交流（日本人の考え方はいまだに読めないでいる。もっと知る必要があると思う）
成長できたこと	<ol style="list-style-type: none"> 1 自立力（自分で決めて、自分で実行する勇氣） 2 異文化への適応能力（文化の違いを認識し、受け入れるようになった） 3 視野や考え方の多様化（自分の考え方しか認めないタイプだったが、先に相手のことを考えるようになった） 4 健康管理（日本に来てから、野菜の大切さがわかった） 5 実行力（やりたいことなら、失敗を恐れず兎に角行動に出るようになった） 6 チームワーク（日本では一人ではできないことが多いので、チームワークの意味がわかってきた）

2.3.2 アイデンティティ形成、日本観の変容、人生設計について（設問5～7）

表8 Aさんのアイデンティティ形成、日本観の変容、人生設計について

個性が確立できた	<ol style="list-style-type: none"> 1 自分の国の人間としての意識が強くなった（母国の悪口を言われたら、反論したくなる） 2 母国と日本の文化の違いに気付いた（日本人は言い訳を言わない、兎に角お詫びする） 3 自分の世代の特徴について意識し始めた（責任感があり、考え方が開放的）
日本のイメージが変わったところ	<p>以前（日本人は中国嫌が多いと思っていた）</p> <p>現在（中国と仲良くしたい日本人のほうが多くいると思っている）</p>
将来の計画について	<p>事務、ネットショップ、フリー</p> <p>将来の定住国 中国、日本を行き来する</p> <p>将来の家庭図 安定した過程を持ち、夫のサポートとして家事育児中心に、フリーの仕事をしたい。子どもは二人ぐらい</p> <p>子どもの将来 自分で決めてもらうが、グローバル的な人になってほしい</p> <p>一番の夢 仕事を決めて、安定した生活がしたい</p>

表9 Bさんのアイデンティティ形成、日本観の変容、人生設計について

個性が確立できた	<p>母国と日本の文化の違いに気付いた（ただのものがないこと、信号が反対、消費税がかかる）</p>
日本のイメージが変わったところ	<p>日本、日本人に対するイメージがほとんど変わっていない</p>
将来の計画について	<p>将来の家庭図 夫と娘2人、息子1人</p> <p>子どもの将来 まだ考えたことがない</p> <p>一番の夢 自分のお店（コーヒーショップ）を開く</p>

表10 Cさんのアイデンティティ形成、日本観の変容、人生設計について

個性が確立できた	<ol style="list-style-type: none"> 1 母国と日本の文化の違いに気付いた（母国人のざっくばらんなところと日本人の配慮がちな性格が対照的である） 2 自分が女性としての個性を認識している（女性としての強さが分かるようになった）
日本のイメージが変わったところ	<p>以前 日本人は公平でまじめなイメージだった</p> <p>現在 みんなそうでもなかった、特に若者</p>
将来の計画について	<p>仕事 国際物流の会社を運営する</p> <p>将来の定住国 日本かベトナム</p> <p>将来の家庭図 家庭を中心に、自分の仕事をしたい。子どもは二人</p> <p>子どもの将来 日本で育ててほしい。大学院まで行かせたい。</p> <p>一番の夢 ベトナムの貧しい地域にの子どもに奨学金を作って、支援していきたい。</p>

表11 Dさんのアイデンティティ形成、日本観の変容、人生設計について

個性が確立できた	1 母国と日本の文化の違いに気付いた（食文化の違いが大きい） 2 自分の女性としての個性を認識している（日本に来てから、初めてスカートをはき、化粧をした。女性らしさを意識し始めた） 3 自分がほかの人と違うところを意識し、それを活かすようにしている（自分がおしゃべりが上手という個性を意識し、それをコミュニケーションにいかしている）
日本のイメージが変わったところ	以前 男が強くて、皆お金持ち 現在 女の人のほうがすごく強いと感じる
将来の計画について	将来の仕事 国際的で、女性向けの仕事 将来の定住国 スイス、ノルウェー、モンゴル、中国、日本 将来の家庭図 子どもたちの教育を重視しつつ、自分も仕事をする 自分の子供の将来 教育できる場所に行ってほしい 一番の夢は モンゴルで女性を守る NGO を作ること

2.3.3 留学動機と留学に対する満足度、自己形成への評価の関連性

この4名の留学生はそれぞれ育つ環境が異なり、性格にも相違が見られているが、アジア出身で、30代前後の女性であり、留学するまで仕事歴を持っていることに共通点が見られる。ここで、この4名に限っているが、留学動機と留学に対する満足度、自己形成への評価がどのように関連しているかを見ることにする。

表12 留学動機と留学に対する満足度、自己形成への評価の関連性について

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
日本留学動機	自己成長型	逃避行型	成功追求型	問題解決型
留学満足度	やや期待外れ	期待通り	期待通り	期待した以上
日本観の変容	両国の国民感情について	変わりがない	日本人の国民性について	ジェンダーについて
アイデンティティの確立	母国人として、自分の世代としての個性確立	母国人としての個性確立	母国人として、女性としての個性確立	母国人として、女性として、自己としての個性確立

おわりに

以上をもって、インタビュー調査とアンケート調査を通じて、アジア出身の女子留学生4名のライフストーリーを明晰化し、特に留学の動機についてカテゴリー化を試みた。そのうえ、今の留学生活に対する満足度、自己形成、アイデンティティの確立、将来の人生設計について、具体的な例と合わせて把握できた。最後に、動機の異なるカテゴリーによって、日本留学に対する満足度や自己形成への評価が異なるものであることが確認できた。

本論文では、調査対象をアジア出身の30代前後の女子留学生にしぼった。特定の世代、性別を対象に実施する留学生調査はいままではまれであって、このような調査を通じて、近年の留学生のアジア出身者の増加や年齢層の多様化、ジェンダー問題への対応に貢献したい。そして、留学生の留学動機を考える際、内面的心理的要素を取り入れた手法を用いたため、とりわけ留学生の視点から出来事や

自己評価を考察できて、いままでの留学生を対象に行われてきた調査と比べて、留学動機のカテゴリーが具像化でき、新たな知見が得られたとは言えよう。今後の課題として、より広い範囲で複数の留学生を対象に調査を実施し、今回の研究で提起したものを検証、改善し、さらに留学生の受け入れ対策について提言していきたいと考える。

参考文献

- Kenneth J. Gergen (1994). *Realities and relationships, Soundings in social construction*, Cambridge, Harvard University Press.
(永田素彦、深尾誠訳 (2004). 『社会構成主義の理論と実践 — 関係性が現実を作る』ナカニシヤ出版)
- 源島福己 (2014) 「外国人留学生の留学目的の変容とキャリア観に関する考察」長崎大学留学生センター紀要 21-22 1-30 頁
- 茂住和世 (2013) 「大学在学中の私費留学生の時間的展望と『日本留学』の意味」東京情報大学研究論集 Vol.16 No.2 1-14 頁
- 竹内光恵 (2010) 「徳島大学留学生アンケート調査 — 留学生の目的と経験の評価、今後の課題 —」徳島大学国際センター紀要第6号年報 第7号 12-15 頁
- 譚紅艶、渡邊勉、今野裕之 (2010) 「動機づけの自己決定性が在日中国人留学生の主観的幸福観及び学習・生活への適応に及ぼす影響」目白大学心理学研究 第6号 43-54 頁
- 恒吉僚子、川歌光一 (2012) 「東アジアの教育 — その歴史と現在 — テーマ：越境する留学生 — 文化的融合と寛容にもとづく受容のために —」日本教育学会第71回大会報告 69-79 頁
- 牧野篤 (2012) 「東アジアの教育 — その歴史と現在 — テーマ：東アジア留学生のライフストーリーをとらえる」日本教育学会第70回大会報告 108-109 頁
- 中山亜紀子 (2010) 「言語学習者のライフストーリーをめぐる覚書 — 言語習得 (使用) という複雑な現象 —」佐賀大学留学生センター紀要 第9号 91-103 頁